

ある死生観

増谷文雄

(安博)



岸本英夫博士における死生観

わたしどもは、いろいろのことを教えてくれている死生観を、古来からたくさんもつており、あるいはしつております。だが、今日は「ある死生観」という題目をかかげたのでありますが、この「ある」というのは、単数を意味するわけで、ある一人の死生観を、ここにとりあげてもうしあげたいとおもつております。それは、この一月になくなりました。岸本英夫博士の死生観についてであります。

なにゆえにそれをえらんだかともうしますと、第一に、かれは、わたしどもに、もつともちかく生きた人だからで

あります。もつと正確にもうしますと、わたしどもと同時代の人ののこした死生観である。それとともに、わたしにとりましては、友人の死生観なのでございます。それゆえに、はなはだ関心が深いわけでございます。第二には、どういう生活のなかから、こういう死生観が成立してきたかということ、わたしどもは、なまの材料をもつてしつていからでございます。第三に、この死生観は、ひじょうな深い感銘を現代の人びとにあたえており、わたしは、いろいろな人びとの間で、強い論議の対象になつていることをしつていからであります。

さいわいにして、かれの死生観は明瞭なかたちにおいて書きのこされております。まずそのことからもうしあげて

まいります。

まず「在家仏教」の百号（昭和三十七年七月号）に、「一つの宣言」という題目のもとに、かれは、じぶんの死生観をのべているのでございます。かれが発病しましてからなくなりまして、ほぼ十年間でありましたが、最初から死生観が成立していたわけではなく、ようやくそれがかたまりかけてまいったのが、おそらく一昨年のものであろうかとかんがえるのであります。それをさいわいにして「在家仏教」に掲載することができたのであります。

この「一つの宣言」は、じつはNHKの「人生読本」で、三日間、かれが話したものであります。ただし、これはNHKの都合で、そのテープがただちに消されてしまったので、したがってそのメモにより、もう一度「在家仏教」のために、話してもらったものであります。ですから、もとをたどれば「人生読本」であり、これには、ひじょうな強い反響が全国からあつまつたようでありました。

ついで昨年の九月二十四日、これもNHKで、「日本人の死生観」という一時間ものの教養特集座談会がございました。この座談会には、亀井勝一郎、唐木順三、霜山徳爾の諸先生、それにかれがくわりました。これもまたひじょう

うな反響があつたようで、再放送があり、さらにそのうち聞きそこなつた人たちのために、三たびの放送がおこなわれたものであります。それを「在家仏教」の百十七号（昭和三十八年十二月号）に転載したのであります。

それから昨年十一月、思想雑誌「理想」のためにかれは「わが生死観」というかなり長い論文を書いているのでございます。これは、かれの東大の図書館葬がおこなわれたときに会葬者に配付いたしました。

この「わが生死観」は「理想」の十一月号のための原稿で、十月のある日の朝まで書きつづけました。そして、その日の羽田発の飛行機で、アメリカにとび、ワシントンで開催された日米文化会議の日本委員の一人として出席をいたしました。そのとき、かれの死の直接の動機になりました最後の発作がまいり、それ以後、間もなく人事不省におちいり、危篤状態がつづいたのであります。そういう意味におきましては、これはまず絶筆といつてよからうかとおもうのです。

「わが生死観」は、いまもうしあげました三つのなかでは、もつとも整理されたかたちでのべられたものであります。しかし、これはそういう事情のもとに書かれたために

最後のところが、未完に終つてゐる。したがつて、最後のむずびは、こういうぐあいになつております。

「私は、ここまで論じて、ようやく、その出発点まできた。しかし、私はもはやこの稿を終らなければならぬ。如何にしてよく生きてゆくか、如何にして『別れの時』である死に処するか、このような問題をすべてあとに残してしばらく筆をおく。」

しばらくおかれた筆は、永久におかれるままになつたわけであります。それでは、そのさきにはどのようなことを書こうとかがおもつたか、それは一昨年の「一つの宣告」と称する文章により、おおよその輪郭はわかるようなきもちがするのであります。もしそのさきを書きつづけますならば、「一つの宣告」にのべておりますようなものをもうすこしねりにねつて書いたのではないかとおもうのであります。「わが生死観」のなかにのべられてきております部分は、あとからだいたい整理されたものであつて、最後のおもいさだめができあがつたときに、まえのものがついてくるというのが、あらゆる人の死生観なり生死観の成立の順序であろうかと、わたしはかんがえているのであります。

死のおそれの分析

ともあれ、そのような具合にして成立し、そのようなぐあいにして書きのこされたかれの死生観は、いろいろな感銘を人びとにあたえ、いろいろな論議の対象になつているのでありますが、これはいろいろな意味において、わたくしどもにかんがえさせるところがおおいのであります。

第一には、これは古い伝統のもとにおいてでなく、自己の死との対決という必死の体験をおして成立しているのであります。そのことにおいて、きわめてなまな感銘を人びとにあたえるものとなつていとおもふのであります。

第二には、かれは一人の宗教学者であります。今日の日本における宗教学、あるいはもうすこしひろい意味において宗教の学の領域においてリーダーシップをもつておつたところの宗教学者であります。宗教学者は、宗教の諸現象を客観的なたちばから研究するわけであります。いつも宗教をそういう角度からだけみているのではないのですが、学者としては、いつも客観的なたちばから宗教をじつとみるという訓練をうけてきている。そういう意味においての

日 実 月 實

矢野 絢

(富士三機銅管株式会社社長夫人)

加藤様御夫
妻の御尊きに
当麻寺に三位中将姫の像安
置さる

花冷や中将姫の黒髪も

て私共老夫婦は、在家仏教
協会の皆様の仲間入りをし
せて頂き、殊に此度は春た
けなわの大和古寺巡りが出
来ました事は忘れ得ぬ喜び
でした。

旅の句をお笑ひ草に、

山の辺を北に進めば山村御
殿あり
尼御所の木蓮崩るひそけ
さに

室生溪谷入口大野寺にて

御裳に糸ゆれ蹴れて磨崖

仏

室生寺の朱の橋を夫婦並

びて渡る

霞立つ女人高野の連二人

名に負ふ初瀬寺に詣で

花辛夷長谷のきざはしい

と過か

壺坂にて(盲人養老施設あ
り)

壺坂や御眼も濡れて花の
弥陀
花の香や盲老の黙乱すま
じ

春日遅々閑かなる飛鳥野を
行く

かぎろへるあすか少女に
まぎれんと
薫咲く低き築地に日や満
てり

一人の宗教学者によつて、これが書かれているのでありま
すから、したがつてかれのかがえる死生観は、宗教につ
いての知識のお浅いものによつてかがえられる死生観
とは、いささかちがつた、あたらしい意義をもつておろ
うかとおもうのであります。

それとともに、ごぞんじのごとく、かれはガンという病
氣をえまして、十年間それとのたたかひをやつておしま
した。わたくしどもは、いつ死ぬかかえなければなら
ないほどせつぱつまつておりませんが、かれは、刻々と死
がちかづくなかで、じつと死をみつめていかなければなら
なかつた。そのなかでつくりあげたところの死生観な
であります。ここはなあとおもいながら、どうしてもわたく
しどもがそれに抗しえざるところの力を、この死生観がも
つているゆえんもそこにあるかとおもうのであります。

「わが死生観」の内容を分析しますと、これはつぎのよ
うな構造をなしているということができるのであります。

かれは、この死生観のなかにおいて、死生観とか生死観
をかたるとき、二つのちがひがあることを、まず最初にの
べているのであります。

その第一はなんであるかという、観念的なあたまでか

んがえられた死生観ののべかたも、またわれわれの人生のなかで、きわめて役だつものである。しかし、死と直接むかいあつての死生観、それをかれは生命の飢餓状態のなかにあるものの死生観だと表現をしております。このことは、かれがいろいろとかんがえた末に、じぶんのおかれた状態をもつともよく表現していることばとしてつかつたのであろうかとおもうのです。この「わが生死観」には「生命飢餓状態に身を置いて」という副題がつけられておりますのはそのゆえであります。ですからかれは、世のおおくの死生観にたいし、一つの宣告をやつております。

さて第二に、かれは死のおそれというものの分析を、じぶんはやつたとしるしております。かれがいつから死のおそれの分析をやりはじめたかは、わたしは、友人としていつしよに日々の生活をやつておりましたので、だいたいいつごろからだつたかなと、いまでもおもしろいおこすことができるのであります。はじめのうちは、やはりかれもまた死のおそれから、あるいは死のおもしろいからにげようとしたむきがないではない。これはとうぜんなことでありませう。「もしこれをわすれることができたならばなあ」というような段階もあつたことは、あきらかであります。たとえば、か

れは碁がうまい。しろうとの四段をもつておつた。しかし忙しくてそういうことから遠ざかつていたかれが、そのころ土曜日、日曜日になりますと、ひじょうに熱心になつて打ちはじめたのです。わたしはかれより一目弱いのですがしばしば「おい、打とう」といつてきて、ときには打たされたのです。四段ぐらいになると、それに集中することができます。そこでかれは「この間はおれもわすれることができるんだ」といつておりました。そんなことで、いろいろなところについて碁をうつていたようであります。あれは死のおそれに直面して、それを分析する以前のことであつたとかんがえております。死のおそれの分析にとりかかりましたのは、ずつと近年になつてからであります。これをどういふぐあい分析していちおうの解決をえたか、死のおそれをじぶんでじつとふりかえりながら、もちろん死ぬるときの苦痛といつたもんだい、断末魔のこわきなどもおもつていたであります。しかし、ほんとうにこわいものはなにか、それは、じぶんというものが、すべてなくなることなのであります。生命が終わるということをおしつめていくと、それはじぶんというものの喪失である。これは精神的なおそれであるとおもいます。じぶんが永久に

この地上からきえていくことにたいするなんともいえないおそれ、それこそかれが、死のおそれの最大の要素である気がついた。そこでそのときにとうぜんでてきますもんだいは、死後の生命、死後のわたしはいつたいどうなるかということであつたはずであります。

死をみつめていく

死後の生命のもんだいがでてくるとともに、かれは、それまでにまなびしつておるいろいろな宗教的な知識を利用していかんがえられるのであります。そこで、これまでたくわえてまいりました知識のなかにはいつて、従来の死後の生命のもんだいのかんがえかた、すなわち死後の生命のもんだいあるいは来世観を吟味しはじめた。かれはかれ自身のもんだいとして死後の生命のもんだいにはいつていつておりますが、それ以前には、そのもんだいにそう深くはいつていなかつた。かれは従来の来世観のもんだいをずつと克明に検討してまいりましたが、そのなかからは、レディメードにとりあげるものをみいだすことはできなかつたということができようかとおもいます。

かれは、従来の来世観のもんだいを二つに分析しております。第一には、かれは、天国、パラダイスとか極楽とか地獄とかいつたかんがえかたの一群の来世観をあつめて、いちおう前近代的来世観ということばでひつくるめております。またそのほかに、近代人のなかには、そういつた来世観、たとえば極楽とか天国とかいうかんがえかたを、文字どおりをそのままにはうけつけていないけれども、それにながしかの解釈をくわえることによつて、なんとかあたらしく死後の生命の存続を納得しようとおもつて組みあげた論理が、いくつもあることをかれはかんがえた。これを近代的来世観ということばでよんでるのであります。

かれのあの知性は、前近代的来世観に直接あたたまをさげることをしていない。と同時に近代的来世観も、まだ中途はんばで、なんとか解釈して、そこに死後の生命の存続をかんがえようというかんがえかたが、りつぱに建設されているとはいいたい。それで近代的来世観も、とつておりません。これがあるといんだがなあとおもいながら、どうもそのなかにじぶんをなげこむことができなかつたようであります。そうしてかれは、「おれの知性というものは、はなはだ強靱であるなあ」などいつて、じぶんで反

省しているのであります。

かれは仏教に關しましては、ときどきはあやまちをおかしたこともありましたが、なんのはなしであつたか、ラジオ放送で、かれが、仏教では、元來、靈魂というようなものは、もうかんがえないことになつてゐるのに、念仏のお宗旨のほうでは、またそれをとりあげてゐるなんていうことをいつた。その放送を加藤（弁三郎）さんが聞いておられ、「あの岸本先生のかんがえかたは、まちがつていますよ」とおはなしになりましたので、それを、わたしが、かれにつたえしました。そうしたら「そうか、それはまちがいか。それじや極楽にいくとかなんとかいうあのかんがえかたはなんだ」ともうしますから、「あれは業の相續だよ」といつたら、それでスツとわかつた。かれは、あやまちはあやまちとしてスツといわれるのです。「そうか、それは悪かつた。それではあたまをさげるから加藤さんよろしくいつておいてくれ。ああそうか、あれはサンスカーラか」といつておりました。ですから、そういうもんだいを、生きてゐるうちにわたしどもも十分はなしあつておけばよかつたが、おたがいにいそがしいものですからできませんでした。

そういうようにして、いままでの來世觀のいづれにも満足しなかつたかれは、素手でもつて死のまえにたつてみようとした。これは宗教学者として、近代人として、どうしてもいちおうそうやつてみたいとおもつたにちがいないとおもいますし、かれの知性は、いちおうそれにたえうるだけの強靱さをもつていたとかんがえるのであります。

そこでかれは、死とはなにかと、とことんまでかんがえはじめてまいりました。これはむずかしかつたとおもうのです。ほかのことで論じあいながら「おい、死とはなんだ」などと、かんたんには聞けませんから、かれもあまり議論をしたことはなかつたが、かれ自身としては、死というのは実体をもたないものだといういいかたで、一つの解決に到達をいたしております。

かれはじつと死を凝視して、ちやうど生と死とは、光とやみとの關係にあるものだということ。物理的な自然現象としてのくらやみというものは、それ自体が存在するものではなくて、光がないというだけのことである。光のない場所をくらやみというがごとく、人間にとつてその光にもひとしいものが生命である。その生命のないところを人は死のくらやみとしてかんずるのだということに気が

ついた。「おい増谷、おまえはそういうことをまえからしつておつたのか」と聞かれれば、わたくしはしつております。ですからもしわたくしに聞いてくれればはなしをした。しかし、かれが自身でそれをみつけたことが、たいへん力あることだとおもいます。

別れのときの準備

「四十二章経」に「仏曰く、それ道を見るは、たとえばたいまつを持ちて暗やみの室に入れば、その明即ち滅して光明のみ独り存す」というところがあります。これを仏教では、光がくればやみはすぐさるものだといういいかたでふるくから明来闇去とか、明来——ともうして、有名なことばになつております。かれはそれまでに、あまり仏教をやつておりませんでした、そこへじぶんのだどりつてまいりました。あるいは道元禪師の「正法眼蔵」のなかに、それを「生より死に移ると心得るは是れ誤りなり」と教えてある。生があつてそのつぎに死があるとかんがえるのはあやまりだ、というかんがえかたをしているのであります。すでにブツダもいつておられる。ブツダは生老病死

をもんだいにされておられます。その最大の項目は死でありまして、それを苦ということばでいいあらわしたわけですから。ブツダがああ苦提樹のもとにすわつてさつたそのときには、苦あるいは死は実体ではないということをやさつた。それがさつりの急所なのであります。そうすると、かれは、ブツダとおなじようなさつりの境地に到達したことにのみなりかねないのであります。ブツダは「苦は縁生なり」といわれておられます。縁生とは、縁起の法則によつておこつている。縁とは条件ということばで、いろいろな条件がくみあわさつてこれが存する。光がないという条件があるからここにくらやみがあるのとおなじように、その条件がなくなつて光がここにあればくらやみはない。他の条件にしたがつてそれが生じている。それを今日のことばで、苦悩あるいは死それ自身は、実体でないといひあらわすことができますはずであります。そこに到達したときに、わたしは大発見をしたとおもつたと、かれは書いております。これがかれが生死觀をかんがえてきました一つのおおきな段階であります。

死が実体でないとすれば、そこでもんだいになつてくるのはなにか。それは、けつきよく、よく生きる、十分に生

きるといふことよりはか道はないのであります。そこでかれのまえには、死のもんだいをこえて、いかによく生きるべきかというもんだいがおおきくすがたをあらわしてくるのであります。そのもんだいに到達いたしましたときに、かれは現代人として、充実した生命觀を説いております。そうして、とにかく生きてゐる間をりつばに生きぬこうと、ことにその晩年の数年を、かれは、ばか正直みたいに、自己の信念をつらぬいて生きたのであります。こういうときのばか正直はじつにりつばなことだともいいます。

充実した生命が死を克服する、死を克服するといつても死は実体ではないが、死に勝つことは充実した生きかたをすることだと、日々ひじょうないきおいでしごとをしたのであります。わたしも、ときどきそんなにいそがしくしないで、いいじやないかといひましたが、ほんとうにいそがしい毎日でありました。わたしは、はなはだ東洋的に、よくかくるものはよく生きるなどといつて、あまり人まゑにでてガタガタやらないことが、よく生きることだといふかんがえでおりますが、かれは、しごとのまえにとびだしていきましました。充実した生活をやり、それこそうちにかえつたときには、大木のたおれるがごとくに、寝どこにた

おれこむというよな生活を日々つづけておりました。そうしてそれが、ようやくじぶんの生活になつてまいりました。「とにかく一所懸命にしごとをする、それよりほかにおれにはなにもないんだよ」というよないいかたを、ときどきしておりました。

かれは最後に東大の図書館長をやつたのです。「おい、茅さんがおれに図書館長をやれというんだ」ともうしますから「そんなことよしとけ」とわたしはいつたのです。しかし「おまえがそういうのもよくわかるけれども、おれはやるよ」といつて、図書館長をひきうけた。その晩にすぐアメリカのロックフェラーに電話をかけ「じぶんは図書館の大改造をやるから援助してくれ」といつて、何億かの大金をひつぱりだし、図書館をつくりかえてしまつたのであります。とにかくわたしどもではまねのできないことをやつた。「一大事とは、今日只今のことなり」といつと、たいへんうれしがり「そのことばはどこにあるんだ」と聞くのです。「禅の教育をうけた人はみんなそうだ」「うん、そうか」といつておりましたが、かれは生をわすれるといふよりも、死をかんがえぬいて、生命の絶対肯定論者になつていたといふことなのであります。

ところがかれの生死観には、そこまでしか書いていない。かれは、その生活をほんとうに充実してやつておつたが、それがじつは出発点なのだということを、かれはじぶん自身でしつていた。そうしてそれからさきは、じぶんの死のしづかなる準備というものを、あのいそがしい日々の充実した生活のなかでやつていた。また家族にたいする準備などもしづかにやつていたのであります。

これからさきのことをかれは「一つの宣告」のなかに書いています。かれは死は「別れのとき」だとかんがえておつたのであります。「別れのとき」などともうしますと、はなはだ平板なことばでありますが、われわれはそのことばの深い意味にまで、十分はいつていかなければならぬのであります。人間にはたくさんの別れがある。あすちよつとどこかに旅行してくるといふ別れもあるし、外国にいくときも別れである。外国にいくとなると、われわれは一所懸命に準備をしなければならぬ。わたしなども、外国にいくときは、つまらぬとおもいながらも、やつぱり一所懸命準備をするわけでありませう。まして、もうかえつてこない旅にでるといふときには、またちがう準備がひつようであります。十分準備をして、さきのほうのス

ケジュールもつくつてしまつて、そのうえでやすんじて旅にでられるのではないか。これがかれの「別れのとき」にたいするかんがえかたであります。そこには、トランクの準備もあるし、こころの準備もある。さらに、いろいろのスケジュール、すなわちこころのねがいをもつて旅にでなければならぬ。かれは、しよつちゆうアメリカやヨーロッパにでかけておつたくせに、やつぱりでかけるときには、その朝まで準備をしておりました。じぶんの永遠の別れのときにも、かれはそういう準備をしておりました。ただかれは、その準備を他人のかりもののトランクでやつていくのではなしに、じぶん自身で一つ一つかんがえていつて、別れの準備をしていた。かれにもうすこの生命をあたえておりましたならば、その別れの準備をどういうぐあいに綿密にたてておつたかを、しることができたのでありませうが、この出発点までたどりついたのは、かれは死の、そうまえのことではなかつたのであります。

その別れは慌しかつた

それからさきのかんがえかたを、かれはいつたいどうい


うぐあいにととのえたかとかんがえてみますと、死は実体をもたないとか、あるいは充実した生命がほんとうの死に勝つ道であるとか、そういうかんがえかたのレールのうえにのつておつたにちがいない。かれはクリスチャンの家に生まれたのです。けれども、じぶん自身で重大な人生のもんだいをやつてきているうちに、かれのかんがえかたは、いつの間にか仏教のレールに転轍してきていることを、はつきりしることができるのであります。さきほどどうもしましたように、死とは実体をもたないというかんがえかたは仏教のかんがえかたのなかに、明瞭にうちだされております。

人間はおおきくわけると、二つのパーティにわかれるとかんがえられます。ウィリアム・ジェームスは、例の「バラエティ・オブ・レリジヤス・イクスペリアンス」のなかで人間の二つのタイプ、まずヘルシー・マインド、正常なる、あるいは健康なる心情をもてる人、もう一つには、シック・マインド、病めるたましいをもてる人、というかんがえかたをしております。

かれは、シック・マインドをもつた人ではなかつた。ガンをのぞいたならば、からだも健康、精神も健康であつた

のであります。この心情のなかで、かれは死と対面したわけなのであります。仏教は、じつは両方をちやんととのえてもつているのです。

ヘルシー・マインドのながれをずつとたどつてまいりますと、原始仏教から禅にいたるながれがここにある。そうしてシック・マインドのほうには、浄土門などのながれがある。したがつて、かれは仏教的な論理のなかにはいつて、これからさきは、このながれをおつていつたのではなかつたろうかとおもうのであります。かれのあの精神をみておきますと、合理性というものとことんまで忠実であらうとした。そして、幻影、幻想にはどうしてもあたまをふつて酔うまいとした。しかもなおこの出発点以後においては、その死後の生命のもんだいを直視し、おおくの人間のねがいに、あるいは「別れのと き」にふさわしい、いろいろな条件をととのえて、それを

酒は... 
利久
協和酸酵

うちだしてくれただろうとおもうのでありますが、ただ別れの準備といつたところまでたどりついただけで、そこでたおれてしまいました。そういう意味におきまして、かれの死生観は「わが生死観」に書きましたように未完のままに終りましたとおなじように、かれの、こういうもんだいにとりくんでの生涯も、未完に終わったのであります。

かれのもんだいでは、わたくしはいろいろなかたから、はなしかけられるのであります。このまえ増永（靈鳳）さんにあいましたら、「禪のほうではあれでいいとおもうけれども、おまえのほうではどうだ」といわれた。おまえのほうではというのは、わたしは原始仏教をやっているのですが、出身は浄土門でございすから、浄土門のほうではこまるだろうというわけなんです。しかしべつにこまりはいたしません。西にいくものは同時に東にいくことはできませんが、くるりと地球をまわると地球はまるいのですから、一致するのであります。

そこで、かれはこちらの道をずつとおつていつて、最後にいつたいなをいじだしたるうか。それはただ空想をたくましゆうするのみでありますが、ただし、わたしの空想は、たんなる空想でなく、いさきかかれが歩いており

ました道をしつているつもりであります。それだけに、あれを、もうすこし完成させたかつたとおもうのであります。あまりにあわただしい終りでありましたために、人間のねがいにたいする、あるいは別れの準備の内容といつたようなところでの充実がみられない。このことがおおきく論議を生んでいる理由であろうとおもうのであります。

かれにもうすこし生命があたえられましたならば、かれのいう前近代的な来世観をひよつとすると肯定したかもしれない。すくなくとも、あれにも意味があることを、みとめてくれただろうとおもうのであります。

かれは他人のトランクをかりるような調子で、従来のものをすぐそのままに肯定することはしなかつたのであります。じぶんの足でふみしめ、血みどろなたたかひのあげくに、かれは出発点までたどりついたのであります。しかし、もしかかれがしろうとしないのだつたならば、ここまではこられなかつただろうとおもうのであります。だからかれもまた宗教をまなんだかひがあつたといえましよう。ようやく出発点まではたどりついたのであります。あたらしい意味での宗教者の課題をここにおいて去つてしまつたのであります。

（東京会場におけるお話し）